厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
分担研究報告書

# 遺族の抑うつに対する行動活性化療法の予備的検討に関する研究

研究分担者　浅井 真理子日本医科大学医療心理学教室
鈴木 伸一　早稲田大学人間科学学術院
研究協力者　小川 祐子国立がん研究センター中央病院精神腫瘍科
平山 貴敏国立がん研究センター中央病院精神腫瘍科
藤森麻衣子国立がん研究センターがん対策研究所
古谷佐和子ＮＰＯ法人パンキャンジャパン
吉川栄省　日本医科大学医療心理学教室
鋤柄のぞみ日本医科大学学生相談室

研究要旨 本研究は、うつ症状の改善への有効性が確認されている行動活性化療法プログラムを遺族に適用し、その効果を検証することを目的とする。本年度は新たな倫理指針に基づいて、従来の対面にWｅｂ実施を追加した内容で倫理審査の承認が得られ、３名に開始することができた。

## Ａ．研究目的

がんで配偶者を亡くした遺族の実証研究から心理状態を規定する最大の要因は死別後の対処行動であること（Asai, Uchitomi et al, Support Care Cancer, 2012）、また国内外の論文調査（2000～2016年）から認知行動療法の要素を含み、個別に実施し、精神的苦痛ありの人のみを対象とした場合に効果量が大きいこと（浅井・堂谷　日本グリーフ＆ビリーブメント学,2019）、さらには海外の遺族研究から対面およびインターネットによる行動活性化療法が遺族の抑うつに有効であること（Papa et al, Behavior Therapy, 2013; Lits et al, Behavior Research and Therapy, 2014）などを鑑みた結果、行動活性化療法が我が国の遺族の抑うつに対して有用であるという仮説を得た。そこで本研究では、研究者らががん患者の抑うつに対して開発した行動活性化療法プログラム（日々の充実感やよろこびを取り戻すプログラム：平山、小川、鈴木　他, 日本総合病院精神医学, 2018）を遺族に適用し、その有用性を評価することを主要目的とする。副次的に、不安、行動面の活性化、価値に対する有用性およびプログラムの実施可能性を評価し、併せてプログラムの改良点を収集する。

## Ｂ．研究方法

(1)　研究デザイン　前後比較試験
(2)　対象　遺族20名
取り込み基準:以下のすべてを満たす遺族を対象とする。
①　20歳以上で死別３年以内のがん患者の遺族、②抑うつが軽症以上である:PHQ-9が10点以上、③全８回の研究に参加できる、④日本語が話せる、⑤書面同意が得られる
除外基準:以下のいずれかを満たす場合に対象から除外する。
①重篤な身体症状または精神症状（認知機能障害、意識障害、精神病症状を伴う重度の抑うつ状態、切迫した自殺念慮、過去の自殺企図歴）を有する。尚、65歳以上、あるいは通常の指示が理解できない場合には事前面接時にMMSEを施行し、23点以下を認知機能障害ありとする。②過去に行動活性化療法などの専門家による介入を受けたことがある③研究実施者に本プログラムへの参加は困難と判断される
(3)　介入プログラム（行動活性化療法）
対面またはWeb、個別、全８回（1-2週に１回で約３か月間）
(4)　評価項目（介入前、介入直後、介入２週間後、介入３か月後に評価）
・主要評価項目：PHQ-9
・副次評価項目：BDI-Ⅱ、GAD-7、Behavioral Activation for Depression Scale-Short Form (BADS-SF) 他
・実施可能性：完遂割合
（倫理面への配慮）

人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針 ガイダンス（令和３年４月16日）
に基づき、日本医科大学中央倫理委員会に多機関共同研究の承認を得たのち、実施施設（日本医科大学、国立がん研究センター中央病院）での実施許可を得た。

Ｃ．研究結果

パンフレットを用いた公募またはがん患者の主治医からの紹介によって、遺族10名と連絡を取った。1名は参加辞退、2名は返信なし、4名が適格基準を満たさなかった（3名はPHQ-9が10点未満、1名は研究実施者が参加は困難と判断した）。残り3名のうち1名は身体症状が出現して中断、2名がWebで実施中である。

Ｄ．考察

公募と主治医からの紹介で遺族を募集したが、4か月で10名と応募者が少なかった。また適格基準を満たす遺族が10名中3名と少なかった。PHQ-9が10点未満の遺族が10名中3名いる一方で、20点以上の2名は参加が困難であったり中断したりしたことから、対象者の適格基準としての抑うつの重症度に関しては今後の検討を要する。またWeb実施の場合でも評価用紙は郵送しており、Webで完結できるシステムの利用などは今後の課題である。

Ｅ．結論

本年度からの新たな倫理指針に基づいて、従来の対面にＷｅｂ実施を追加した内容で倫理審査の承認が得られ、3名に開始することができた。しかしながら、本年度も新型コロナ感染症下で、がん患者の家族は病院での面会制限がある状況であり、主治医が死別後の遺族に研究依頼することは難しく、その影響もありリクルートが難渋している。今後は遺族のリクルートやWeb実施に関する研究方法の改良が課題である。

Ｆ．健康危険情報

なし

Ｇ．研究発表

1. 論文発表

1. 浅井真理子　がん患者の遺族のための行動活性化療法を用いた抑うつ軽減プログラムの開発　日本医科大学基礎科学紀要,第50号,21-28,2022
2. Akechi, T., Kubota , Y., Ohtake, Y.,  Setou, N., Fujimori, M., Takeuchi , E.,Kurata, A., Okamura, M., Hasuo, H., Sakamoto, R., Miyamoto, S., Asai, M., Shinozak, K., Onish, H., Shinomiya, T., Okuyama , T., Sakaguchi, Y., Matsuoka, H. Clinical practice guidelines for the care of psychologically distressed bereaved families who have lost members to physical illness including cancer. Japanese Journal of Clinical Oncology (in press)
3. Asai, M., Matsumoto, Y., Miura, T., Hasuo, H., Maeda, I., Ogawa, A., Morita, T., Uchitomi, Y., Kinoshita, H. Psychological distress among caregivers for patients who die of cancer: A preliminary study in Japan. Journal of Nippon Medical School (in press)
4. 畑琴音・小野はるか・鈴木伸一　印刷中　がん患者用活動抑制尺度改訂版（SIP-C-R）の作成と信頼性・妥当性の検討，総合病院精神医学

2. 学会発表

1. 浅井真理子　がん患者と家族のためのこころのケア　第61回日本呼吸器学会学術講演会　2021年４月25日　東京
2. 浅井真理子 オンラインでの遺族ケア　第34回日本サイコオンコロジー学会総会、2021年９月18-19日Web開催
3. 浅井真理子　がん患者の遺族のための行動活性化療法を用いた 抑うつ軽減プログラムの開発　第12回　千駄木DSS臨床研究会　2021年12月13日Web開催
4. 浅井真理子　行動活性療法を用いた遺族の抑うつ軽減プログラムの開発　日本グリーフ＆ビリーブメント学会第4回学術大会、2022年２月1-28日Web開催
5. Tajima, E., Hata, K., Tang, Y., Saito, K., & Suzuki, S. 2021 Examination of factor structure of illness perception and its effect on distress in cancer survivors. The 32nd International Congress of Psychology, Prague, Czech Republic, July.
6. Hata, K., Tang, Y., Tajima, E., Suzuki, S. 2021 Cancer Survivors’ reinforcement contingency mediate the effect of activity restriction on depression. The 32nd International Congress of Psychology, Prague, Czech Republic, July.
7. Hata, K., Ono, H., Tang, Y., Suzuki, S. 2021 The Development of a Revised Version of the Activity Restriction Scale for Cancer Patients (Sickness Impact Profile for Cancer Patients Revised: SIP-CR). The 22nd World Congress of Psycho-Oncology & Psychosocial Academy, Virtual Congress, June.
8. 畑琴音・田島えみ・鈴木伸一　2021　がんサバイバーの心理適応改善を目指したセルフヘルププログラムの効果検討　日本総合病院精神医学会第34大会，オンライン開催.
9. 畑琴音・田島えみ・鈴木伸一　2021　がんサバイバーの心理適応改善を目指したセルフヘルププログラム―適用可能性の検討―　第34回日本サイコオンコロジー学会総会抄録集，191.
10. 神野遥香・畑琴音・田島えみ・鈴木伸一 2021 がんサバイバーの就労に関する心理社会的困難の

構成概念－質的検討－　第34回日本サイコオンコロジー学会総会抄録集，192.

11. 三島菜乃･畑琴音･川島義高･鈴木伸一　2021　大学生におけるJapanese Cancer Stigma Scaleの因子構造の検討，第34回日本サイコオンコロジー学会総会抄録集，222.
12. 畑琴音・田島えみ・鈴木伸一　2021　がんサバイバーにおける活動抑制が報酬知覚を媒介して抑うつに及ぼす影響 ―縦断的検討―　日本認知・行動療法学会第47回大会，プログラム・抄録集，308-309.
13. 田島えみ・畑琴音・鈴木伸一　2021　思春期の１型糖尿病患者におけるアドヒアランスに関連する心理要因　　日本認知・行動療法学会第47回大会　プログラム・抄録集，266-267.
14. 三島菜乃・畑琴音・川島義高・鈴木伸一　2021　大学生におけるがんに関する知識の習得状況によるネガティブな認識の差異，日本認知・行動療法学会第47回大会抄録集，358-359.
15. 神野遥香・畑琴音・田島えみ・鈴木伸一 2021 がんサバイバーの就労に関する心理社会的困難尺度の作成と信頼性・妥当性の検討，日本認知・行動療法学会第 47 回大会　プログラム・抄録集，202-203.

Ｈ．知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし